

勞資の意思疎通の悩み

日本精鑛株式會社社長

伊藤保次郎

十月以降の賃金ベース引上げを主題とする秋期攻勢は秋風と共に吹き募つて來た。各重要産業の問題が時期的に頭が揃つたので大がかりな對陣となりそうだ。近年は年中續けさまに問題を孕み企業母體は休まる暇がない。企業體から云えば前回はいく以上應じ切れない所で手を打つたが組合側では獲得すべきものが得られなかつた。今回は是が非でもという攻勢だから。この調子では休戦安定の時間と氣持が得られない譯だ。いつの日に勞資が本當に好意と感謝とをもち合うだろうか。斯う闘争對局面が多くなつては生産を阻害する疲勞素ばかり溜つて積極的な生産意欲が鈍つてくるのは争われない。

しかも組合側の要求提案は企業の實態を勘案して出すというよりも連合組織の統制で一律策定したものを出して行く傾向の強いのも闘争面積と時間を増大させる一因でないだろうか。要求も之れに對する回答もともに慎重誠實なものでなければならぬのは當然であるが、もつと企業と組合との自主性にピンと響くようなものにしてゆきたいものである。

交渉主題の賃金は生活費を充足し明日の勞働力を確保し得るものであるべき前提には異論はないが、其の確保ベースは企業支拂能力に制約を受けねばならぬのは已むを得ない所であつてそこに勞資双方は企業の實態と生活狀況とに認識をもつた上で交渉に取りかからねばならぬ理由が生れてくる。

斯く交渉は勞資双方夫々の認識と協力の上に立つべきであると言つても、その紛争を否定することにならないのは固よりである。眞の協力の裏付に自主的主張或は抗争あるのは當然の心構であつて、唯だ抗争の基本目標が何であるかについて双方の訓練された意思疎通が常に企業体内の清冽な流れとなつておることを切望せられるのである。勞資の闘争は力が結末をつけるのだ。したがつていくら長びいてもいつかは解決がつくのだという言を耳にするが、勞働争議と暴力革命とを直結させるような觀念ならばともかく、甚だしく歪曲された考察というべきである。これ従業員的生活擁護と事業愛護の精神から發展する問題解決を目指す交渉過程においては相互對等の

日本鑛業協會誌(第四卷第十號)

十月號 目次

(巻頭言)

☆勞資の意思疎通の悩み……伊藤保次郎……一

☆金屬鑛山業の資本蓄積と

金融問題……吉永實雄……三

☆チタニウムに就いて……三木榮槻……三

☆タイ、ビルマ、印度鑛業

視察報告(上)……平塚保明……三

☆月間の動き(月間餘積)……三

☆歐米諸國の租稅制度について……三

(解説)

☆改正森林法の概統とその影響……三

(鑛山の科學管理)

☆台帳と日誌……日沼陸夫……三

▽第三、四半期國鐵輸送の見透し……三

▽電力危機にのぞむ……三

▽協會だより……三

▽ニュース……三

▽資料……三

【表紙寫眞】

完成した安中製鍊所鑛石焙燒硫酸工場